

6. 中世の遺構と遺物（第45図）

第2面と第3面において検出された遺構である。面の違いは調査の手順に由来するもので、堆積土は基本層序VI層とした、As-Bを多量に含む暗褐色砂（B混土）を主体としている。遺構としては溝跡（350、1001）と井戸跡（606）、土坑（666）、Pit（626）、浅井戸と考えられる近接した深い土坑3基（580、568・1028、1027）があり、溝からは15世紀代と推定されるカワラケ、井戸跡から志野皿、土坑・Pitから15世紀代の内耳土器の破片が出土している。

溝跡（350、1001）は、途中を近世後半の大規模な池状遺構によって破壊・分断された、本来は同一と考えられるもので、特に1001とした西端近くでは複数回掘りなおされ、部分的な水流痕跡も認められる。カワラケが僅か1点出土している他、流れ込みと考えられる古代の土師器・須恵器の細片が出土した。問題となるのはその走跡で、後述する条里型地割とも、近世以降の町割とも異なる。烏川の浸食した崖線に直行しており、中世鎌倉街道に直行とも言える。その性格は俄かに断じ難いが、何らかの区画であった事は明白であろう。井戸跡（606）、土坑（666）、Pit（626）は調査区北東で互いに近い位置関係にある。遺物の出土を根拠としたが、下位の第3面で検出された礎石をもつPitは中世の可能性がある。しかしながら調査精度の問題もあり、明確な建物跡としての認定は叶わなかった。とはいえた井戸跡や土坑の存在、内耳鍋の出土からは、調査区北東部は生活の場であった可能性が高い。反面、調査区西端から近接して検出された浅井戸は出土遺物皆無で、生活臭はあることを思えば農業用であった可能性が考えられよう。これら遺構・遺物は、高崎城以前の土地利用を考える上で興味深い存在であるが、如何せん断片的な情報であり、残念ながら検討に耐えうるものでは無い。和田城跡との関係も含め、今後の課題としたい。

7. 古代の遺構と遺物（第46図）

第3面として調査を行ったもので、As-B直下の水田関係遺構が検出された。水田跡は、低く潰れ気味の畦畔によつて区画された田面を計16面確認した。田面は東西方向では東へ行くほど標高が低くなるが、南北方向では標高にほぼ差がなく、基本的に水掛かりは西から東の方向性をもっていたことは明らかである。水口は近世以降の擾乱が激しい為に大半不明であるが、田面②の南東隅と、③との間の畔に1か所確認できた。水口の在り方からは、田面の標高差にほとんど現れないような傾斜、北から南への水掛けりも推定される。各田面は大小の長方形を呈しているが、完掘できた田面は無い。

畦畔は、畦畔が丁字ないしは十字に交差することで田面を区画している。田面②の北辺のように畦畔がほぼ直角に屈曲する場合、あるいは田面②・③間のようにやや蛇行気味なもの等様々だが、基本的には正方位を意識していると考えられ、条里型地割と呼ぶに相応しい。また、田面⑤・⑪間の東西方向の畔は一際幅広で、いわゆる大畦畔と認定される。南北方向の大畦畔こそ調査区内では確認できなかつたが、少なくとも東西方向の大畦畔は、条里の坪線に相当していたと思われる。

畦畔以外に、田面からは歩行列と判断される、不規則に乱れた部分が2か所、帯状に認められた。歩行列1は田面⑨・⑩間の畦畔上から田面⑤・⑪間の大畦畔にかけてL字状に検出されたもので、複数の列が束となった状態であった。歩行列2は田面⑥・⑦間の畦畔を踏んだ状態で検出され、歩行列1の延長にあることから同一遺構と考えられる。歩行列以外に、田面②の南端西寄りから、東西方向の「へこみ」が検出された。幅0.5m、長さ1.5m程度で底面は平滑であることから、歩行列を牛馬とすれば、「へこみ」は人間の歩行によって形成された可能性があるだろう。

今回のAs-B直下の水田跡は、条里型地割に則って形成され、その後の使用で各田面が変貌した後、放棄された様子を示していると考えられる。そして耕作を放棄された草原の中を、条里型地割の畦畔を意識するかのように、牛馬を連れた人々が時折往来する景観があったと推定される。

条里型地割の復元は、高崎市街地での調査事例が極端に少ない為、今回は言及を控える。ただ、本遺跡の北東0.8mの江木諏訪西遺跡のAs-B直下では条里型地割の水田跡が検出されているし、東方0.6mの八島町遺跡のHr-FA混土層下の水田跡も条里型地割の可能性がある。なお、八島町遺跡のAs-B直下では不定形な田面、しかも耕作放棄されていた可能性が指摘されており、今回調査のAs-B直下と、田面や畔の状況は類似しているようである。今後の検討課題としたい。

第IV章 宮元町遺跡の自然科学分析

株式会社 古生態研究所

はじめに

江戸時代の鞘工房跡と考えられる地点から出土した刀剣の柄及び鞘、端材、炭化材を対象として、用材選択を検証するための樹種同定を実施した。また、珊瑚等に付着した金属や目貫の金属組成を明らかにするための蛍光X線分析を実施した。

I. 樹種同定

1. 試料

試料は、刀剣の鞘と柄 25 点、一括採取された木屑から抽出した 3 点、一括採取された炭化材から抽出した 5 点の合計 33 点である。

2. 分析方法

鞘と木屑は、木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の 3 断面について徒手切片を直接採取した。切片をガム・クロラール（泡水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察した。炭化材は自然乾燥させた後、3 断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台に固定した。走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察した。各試料で観察された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定した。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にした。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にした。

3. 結果

刀剣の鞘と柄の樹種同定結果は、第 33 表に併せて記した。木屑と炭化材の樹種同定結果を第 25 表に示す。刀剣の鞘と柄は広葉樹 2 分類群（モクレン属、コナラ属コナラ節）、木屑は針葉樹 2 分類群（ヒノキ、スギ）とタケア科。炭化材は針葉樹 1 分類群（マツ属複雑管束亞属）と広葉樹 1 分類群（クリ）に同定された。なお、鞘の No. 13 は、塗膜片に僅かに木部が残っている資料である。広葉樹であることは確認できたが、観察範囲が狭いために種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複雑管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鉢齒状の突起が認められる。放射組織は單列、1～15 細胞高。

・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1 分野に 1～3 個。放射組織は単列、1～10 細胞高。

第 27 表 木屑と炭化材の樹種同定結果

遺構	時期	試料名	器種	木取り	樹種
314	19世紀 前葉以降	木屑 1	木屑	柾目	スギ
		木屑 2	木屑	板目状	タケア科
		木屑 3	木屑	柾目	ヒノキ
252	18世紀 中葉以降	炭化材	木炭	破片	マツ属複雑管束亞属
				破片	マツ属複雑管束亞属
				角棒状	クリ
				破片	クリ
				破片	クリ

・スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don ヒノキ科スギ属
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個、放射組織は單列、1～10細胞高。

・モクレン属 *Magnolia* モクレン科

散孔材。道管は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は階段状～対列状となる。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

・コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

環孔材。年輪の始め（早材部）に大型の道管が1～2列配列した後、急激に道管径を減少させる。晩材部では小径の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科クリ属

環孔材。年輪の始め（総葉部）に大型の道管が3～4列配列した後、急激に道管径を減少させる。晩材部では小型の道管が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は單穿孔板、壁孔は交互状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・タケア科 subfam. Bambusoideae イネ科

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の纖維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成するが、纖維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不齊中心柱をなす。

4. 考察

刀剣の鞘と柄、木肩、炭化材には合計7分類群が認められた。各分類群の材質等についてみると、針葉樹のマツ属複維管束亞属は、本州ではアカマツまたはクロマツである。アカマツは二次林、クロマツは海岸砂丘等に生育するほか、各地で植林される常緑高木である。マツ属複維管束亞属の木材は、強度と保存性が比較的高い。ヒノキは山地・丘陵地、スギは谷筋や沖積地等に生育する他、各地で植栽される常緑高木である。木材はいずれも割裂性と耐水性が比較的高い。広葉樹のモクレン属は、渓畔や二次林等に生育する落葉高木であり、木材は軽軟で強度と保存性は低い。コナラ節は、二次林の主要な較正種となるコナラや山地の冷温帶性落葉広葉樹林の主要な較正種となるミズナラ等を含む。いずれも落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。クリは、二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。タケア科は、木肩の大きさと木取りから、比較的大型の種類と考えられる。大型のタケア科には、マダケやモウソウチクなど、植栽されて竹林を形成する種類が含まれる。材は、強度、韧性、耐水性が比較的高い。

刀剣の鞘と柄についてみると、塗膜片で木部の観察範囲が狭いために広葉樹としたNo.13と白鞘？とされるNo.26を除く資料が全てモクレン属に同定された。18世紀中葉以降、18世紀後葉以降、19世紀前葉以降の資料があり、端部の作り方などから複数の形態が含まれているが、時期や形態による樹種の違いは認められなかった。この結果から、鞘や柄の素材としてモクレン属が継続的に利用されていたことが推定される。

刀剣の鞘については、寛政13(1801)年の「万金産業袋」に、「刀脇差とともに、鞘の下地はみな厚朴（ホオノキ）なり」と記され、その理由として木材に油脂が少なく、磁石を隔てる効果があることを挙げている。また、「木材ノ工芸的利用」（農商務省山林局、1912）には、刀剣類の鞘・柄とともにホオノキを用いることが記されており、その理由として樹液が少なく、刀身に鏽が生じる恐れが少ないと、秋材部分も柔らかく刀を引くことが無いこと、良く乾燥すれば割裂や狂いを生じることが無いこと等を挙げている。鞘と柄の木取りについてみると、側面が柾目になる資料が多いが、東京都駒馬区に残る刀剣師の聞き取り調査ではホオノキの柾目材を使うとされている（東京都教育庁生涯学習部文化課、1994）。鞘及び柄の樹種同定結果や木取りは、こうした記述とも整合的である。一方、高崎藩では、右京柄と呼ばれる刀装があり、その素材として外国産木材である紫檀（シタン）、黒檀（コクタン）、カリン、タガヤサン（鉄木）が挙げられている（平野・小山、2007）。今回の資料中にも右京柄の可能性がある資料が含まれ

ているが、右京柄の素材として挙げられている樹種は確認できなかった。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、江戸時代の調査事例が2万点を超える東京都の事例でも外国産木材はシタン属等が数例認められる程度であり、その確認数は非常に少ない（伊東・山田, 2012）。外国産木材の利用は、特別なものに限られていた可能性がある。

白鞘？とされるNo. 26は、削出棒状の資料であり、鞘とすれば未成品である。同じ木取りの資料が2点（短・長）あり、接合することができないが、木目の状況と樹種が同じコナラ節であることから、同一個体に由来する可能性がある。刀剣鞘の未成品として見た場合、側面が目になる状況は他の鞘材と同様である。一方、コナラ節は鞘と柄には認められず、またモクレン属とは材質が異なることから、鞘や柄とは異なる可能性もある。

木屑は、何らかの加工で生じた端材に由来する可能性がある。いずれも板状を呈しており、ヒノキ、スギ、タケアシ科が認められた。スギやヒノキは、伊東・山田（2012）のデータベースをみても、江戸時代に利用の多い樹種であり、高崎藩に關する資料でも曲物、櫛、板など、板状の加工を施す器類を中心に多くの報告例がある。これらの木屑が鞘工房内での加工に伴うものとすれば、鞘や柄以外の加工も行っていた可能性を示唆する。

炭化材は、全体が均質に炭化しており、燃えさし等が炭化したものではなく、意図的に製炭した木炭の可能性がある。

炭化材はマツ属複雜管束亞属とクリに同定され、マツ炭とクリ炭が混在した状態が推定される。マツ炭は軽軟で燃焼性が高い。クリも生木は重硬であるが、製炭すると柔らかく燃焼性の高い炭になる。民俗事例では、マツ炭とクリ炭は高い火力から鍛冶燃料材として利用される（岸本・杉浦, 1980）。本調査区では金属を溶解するための坩埚等が出土していることから、こうした金属加工のため燃料材として高い火力を有するマツ炭とクリ炭が利用された可能性がある。

II. 蛍光X線分析

1. 試料と方法

分析対象は、カワラケ2点に付着する

溶融物と、目貫1点である（第28表）。

時期は、近世～近代とみられている。カワラケ2点は、溶融物が付着する内面について、元素マッピング分析および特徴的な

第28表 萤光X線分析試料

分析No.	遺物No.	出土遺構	種別	器種	残存部位	元素マッピング	通常の蛍光X線
1	211	355	土器	カワラケ	口縁～底部	○	
2	186	330	土器	カワラケ	口縁～底部	○	
3	1	330	金属製品	目貫	完形		○

箇所のポイント分析（照射径100 μm）を行った。

目貫は、精密グラインダーを用いて裏面の一部の鋸を除去した金属面について、通常の蛍光X線分析（照射径1mm）を行った。

元素マッピング分析には、エネルギー分散型蛍光X線分析装置の一種である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-9000を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 μAのロジウム(Rh)ターゲット、キャビラリ径が100 μmまたは15 μm、X線検出器はSDD検出器で、検出可能元素は炭素(C)～アメリシウム(Am)である。本装置は、試料ステージを走査させながらの測定により元素マッピング分析が可能となる。

元素マッピング分析を行った後、さらにマッピング図を基に特徴的な箇所を選び、ポイント分析を行った。元素マッピング分析の測定条件は、管電圧50kV、管電流1000 μA(自動設定)、キャビラリ径100 μm、ピクセルタイム180msを1回走査で測定後、ピーク分離を行った。ポイント分析の測定条件は、管電圧50kV、管電流自動設定、キャビラリ径100 μm、測定時間500sに設定し、定量分析はノンスタンダードFP法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。得られた値は、合計が100%になるようノーマライズされている。

第29表 萤光X線分析装置仕様

管球	SEA1200VX		XGT-9000
	最大電圧	50kV	
	最大電流	1000 μA	
ターゲット	Rh		
照射径	8mm or 1mm	100 μm or 15 μm	
集光素子	コリメータ	ポリキャビラリ	
一次フィルタ	内臓(4種)	無し	
照射方式	下面照射	上面照射	
検出機構	エネルギー分散型		
検出器	SDD		
検出可能元素	Na～U	C～Am	
元素マッピング分析	不可	可能	

第30表 カワラケの元素マッピング図中ポイントの半定量分析結果 (mass%)

分析 No.	位 pt	Ni	Cu	Zn	As	Se	Ag	Sn	Au	Pb	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	S03	K2O	CaO	TlO2	MnO	Fe2O3
1	a	—	92.56	—	0.10	0.02	—	—	—	0.30	—	—	0.81	1.41	4.00	0.20	—	0.28	—	—	0.32
	b	0.09	11.26	0.20	0.30	—	—	38.63	—	1.39	—	1.09	4.99	17.17	5.40	0.21	—	8.91	0.42	0.18	9.73
	c	0.05	18.28	0.05	0.11	—	—	0.45	—	9.58	—	1.02	14.60	43.69	2.54	0.33	1.49	2.97	0.73	0.13	3.98
	d	0.02	10.17	0.09	2.13	—	—	0.54	—	1.35	—	0.98	8.09	34.05	11.38	0.20	1.89	22.86	0.40	0.06	5.79
	e	—	1.12	2.37	—	—	—	—	—	0.19	1.49	1.35	18.08	53.78	3.44	0.55	3.83	5.54	1.01	0.16	7.10
	f	—	73.76	—	0.24	—	—	—	—	0.51	—	0.47	1.33	3.38	14.50	0.37	—	2.13	0.08	0.30	2.95
2	a	—	86.26	—	0.07	0.02	0.32	0.39	1.81	0.08	—	—	1.32	2.71	5.70	0.43	—	0.57	0.04	—	0.27
	b	0.08	14.65	0.21	0.67	—	0.05	29.84	—	1.48	—	0.37	4.71	15.09	16.94	0.23	—	4.37	0.18	0.06	11.09
	c	—	42.86	0.20	0.21	—	3.04	—	19.01	0.13	—	0.58	7.52	12.81	8.80	0.88	0.07	2.25	0.28	—	1.37
	d	0.03	5.67	0.21	4.94	—	—	16.46	—	0.78	—	—	10.62	33.51	8.94	0.18	0.31	6.36	0.64	0.05	11.29
	e	0.03	18.62	0.19	1.32	0.08	0.65	2.72	6.98	1.83	—	0.22	9.72	38.04	5.71	0.64	0.28	5.37	0.46	0.02	7.12

通常の蛍光X線分析には、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 μAのロジウム(Rh)ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入して複数条件で測定することでS/N比の改善が図れ、先述のXGT-9000よりも微量元素の検出に優れる。検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)である。測定条件は、管電圧50kV、一次フィルタPb測定用・Cd測定用の2条件、測定時間(s)が300s・1000s、管電流自動設定、照射径1mm、試料室内雰囲気は大気で設定した。定量分析は、ノンスタンダードFP法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。得られた値は、合計が100%になるようノーマライズされている。

第29表に各蛍光X線分析装置の仕様の一覧を示す。蛍光X線分析は表面分析であり、均一とは限らない遺物の正確な組成比を必ずしも示しているとはいえないが、およそその化学組成、含まれている微量元素を知る上では非常に有効な手法である。

2. 結果

カワラケ内面の元素マッピング分析により得られたケイ素(Si)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)、ヒ素(As)、銀(Ag)、スズ(Sn)、金(Au)、鉛(Pb)のマッピング図を図版2、3に、各マッピング図に示したa、b、c、…の各ポイントの半定量分析結果を表4に示す。ポイント分析で検出された金属元素は、ニッケル(Ni)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)、ヒ素(As)、セレン(Se)、銀(Ag)、スズ(Sn)、金(Au)、鉛(Pb)である。

目貫の金属露出部の蛍光X線分析により得られた半定量分析結果を第29表に示す。鉄(Fe)、銅(Cu)、ヒ素(As)、銀(Ag)、スズ(Sn)、アンチモン(Sb)、鉛(Pb)が検出された。

3. 考察

分析No.1のカワラケは、元素マッピング分析では、銅(Cu)、鉛(Pb)の輝度が高い箇所の分布がみられた。また、亜鉛(Zn)、ヒ素(As)、スズ(Sn)も、一部の分布ながら輝度の高い箇所がみられた。ポイント分析においては、銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)の含有量の多い箇所が確認され(ポイントa～c)、亜鉛(Zn)とヒ素(As)の含有量がやや多い箇所が確認された(ポイントd、e)。ほかに、微量のニッケル(Ni)、セレン(Se)が検出された。青銅(銅とスズの合金)や真鍮(銅と亜鉛の合金)といった類の銅合金の溶解に利用されたと考えられる。

第31表 目貫の半定量分析結果 (mass%)

分析 No.	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Pb
3	0.35	98.50	0.39	0.03	0.32	0.01	0.40

第32表 分析結果一覧

分析 No.	遺物 No.	器種	主な検出元素	推定される金属素材
1	211	カワラケ(溶融物付着)	Cu, Sn, Pb, Zn, As	青銅、真鍮
2	186	カワラケ(溶融物付着)	Cu, Sn, As, Pb, Au, Ag	青銅、赤銅 or 金
3	1	目貫	Cu	銅

分析 No.2 のカワラケは、元素マッピング分析では、銅 (Cu)、ヒ素 (As)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) の輝度が高い箇所の分布がみられた。ポイント分析においても、銅 (Cu) やスズ (Sn) の含有量が多い箇所が確認され（ポイント a, b, d）、ヒ素 (As) や鉛 (Pb) の含有量がやや多い箇所も確認された（ポイント b, d）。青銅の類の銅合金の溶解に利用されたと考えられる。また、元素マッピング分析では金 (Au) や銀 (Ag) の輝度が高い箇所が点在しており、ポイント分析においても特に金 (Au) が多く含まれる箇所が確認された（ポイント c, e）。しかし、該当箇所を実体顕微鏡で観察したが、金粒などは特に確認できなかった。表面的に視認できないが蛍光 X 線では検出できる程度の深さに金粒が埋もれている可能性や、銅 (Cu) も多く伴っているため、赤銅（銅と金の合金）の類の溶解に利用されていた可能性が考えられる。ほかに微量のニッケル (Ni)、亜鉛 (Zn)、セレン (Se) が検出された。

分析 No.3 の目貫は、ほぼ銅 (Cu) のみからなる化学組成であった。ほかに、微量の鉄 (Fe)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、アンチモン (Sb)、鉛 (Pb) が検出された。

各遺物から検出された主な金属元素と推定される金属素材を第 32 表に示す。

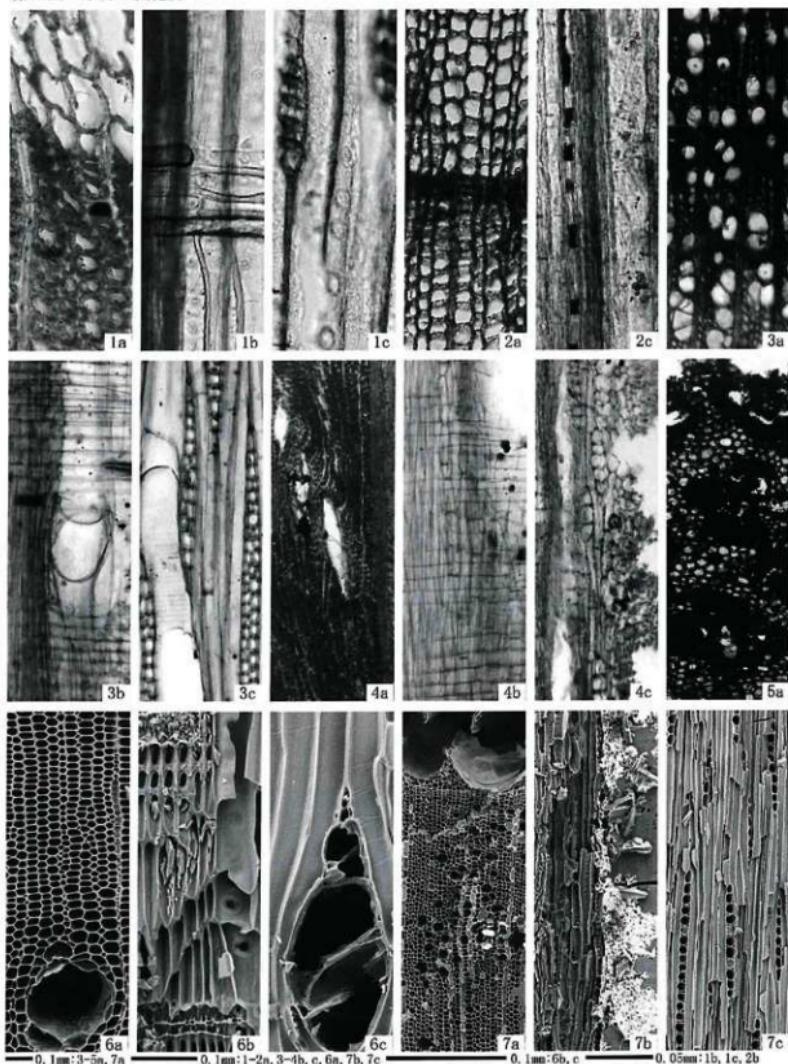
第 33 表 刀剣柄及び柄の樹種同定結果

造形	遺物	No.	時期	器種	木取り	樹種	備考
227	19	覆土	近代	漆鞘	柾目	モクレン属	
227	11	覆土	近代	漆鞘	柾目	モクレン属	
227	8	覆土	近代	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	15	1	19世紀前葉以降	漆鞘	柾板状	モクレン属	
314	4	3	19世紀前葉以降	(漆鞘)	柾目	モクレン属	
314	17	10	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	7	11	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	9	12	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	6	33	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	10	34	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	16	16	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	27	覆土	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	21	覆土	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
314	20	覆土	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
322	—	5	18世紀中葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	報告書未掲載
322	24	10	18世紀中葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
322	14	14	18世紀中葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
322	1	15	18世紀中葉以降	柄	柾目	モクレン属	
398	2	1	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
665	3	3	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
665	25	4	19世紀前葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
676	26		白鞘？(短)	削出	コナラ属コナラ節		
676	26		白鞘？(長)	削出	コナラ属コナラ節		
678	5	13	18世紀後葉以降	漆鞘	柾目	モクレン属	
313	13		漆鞘	柾目？	広葉樹	塗膜片	

引用・参考文献

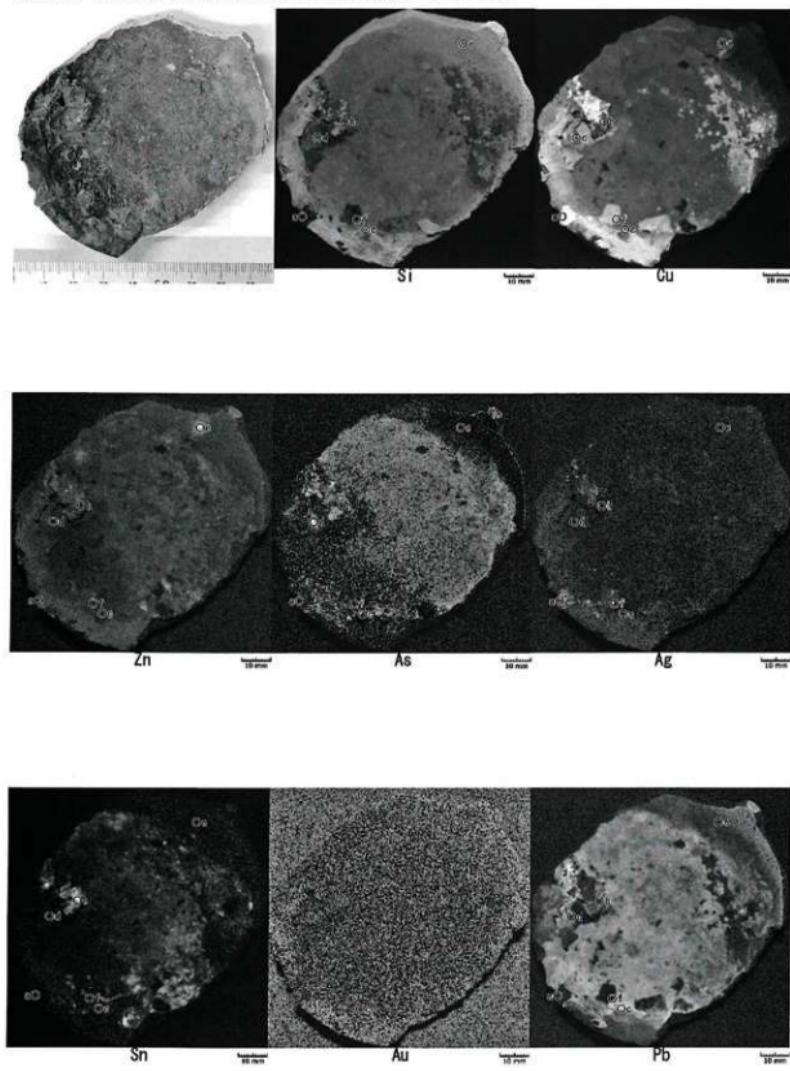
- 林 博三. 1991. 日本產木材. 朝雲閣写真集. 改訂大学木質科学研究所.
- 平野道一・小山友哉. 2007. 右京柄第一・上野國高瀬の特色ある刀装にについて. 鎌馬伝承歴史博物館紀要. 28.93-115.
- 伊藤隆夫. 1995. 日本産広葉材の解剖学的記録Ⅰ. 木材研究・資料. 31. 京都大学木質科学研究所. 81-181.
- 伊藤隆夫. 1996. 日本産広葉材の解剖学的記録Ⅱ. 木材研究・資料. 32. 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊藤隆夫. 1997. 日本産広葉材の解剖学的記録Ⅲ. 木材研究・資料. 33. 京都大学木質科学研究所. 83-201.
- 伊藤隆夫. 1998. 日本産広葉材の解剖学的記録Ⅳ. 木材研究・資料. 34. 京都大学木質科学研究所. 30-160.
- 伊藤隆夫. 1998. 日本産広葉材の解剖学的記録Ⅴ. 木材研究・資料. 35. 京都大学木質科学研究所. 47-218.
- 伊藤隆夫・山田昌久(著). 2012. 木の考古学. 出土木製品用材データベース. 海洋社. 444p.
- 香取正彦・井尾敏雄・井伏圭介. 1986. 金工の伝統技法. 原学社. 230p.
- 日本古事記・絆編翻訳. 1980. 日照鏡今と昔入門. 総合科学出版. 250p.
- 村上 雄. 2003. 金工技術. 日本の美術. 443. 玄文堂. 98p.
- 長野 哲・井尾敏雄. 1998. 金工の伝統技法. 工学社. 157p.
- 中井 泰(著). 2005. 蛍光 X 線分光の実際. 朝倉書店. 242p.
- 農務省山林課(編著). 1913. 木工ノ工芸の原. 大日本山林会. 1306p.
- Richter H.G., Grosser J., Hein L. and Gasson P.E.(著). 2006. 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野健三・安部 久・内海泰弘(日本語訳監修). 海洋社. 70p.
- 島地 雄・伊藤隆夫. 1982. 漆器木質組織. 地球社. 176p.
- 東京都教育庁生涯学習部文化課. 1994. 江戸・東京の漆器 下. 東京都漆器伝承会民文化財調査報告. 385p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(著). 1998. 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語訳監修). 海洋社. 122p.

第47図 木材・炭化材



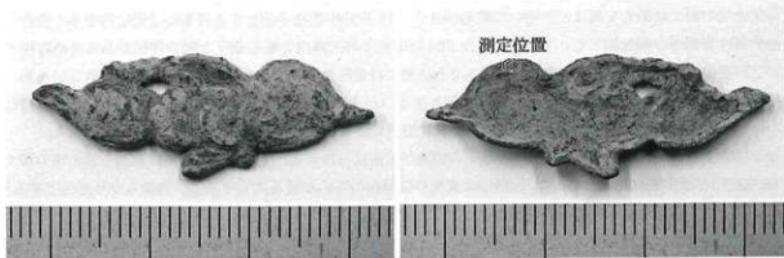
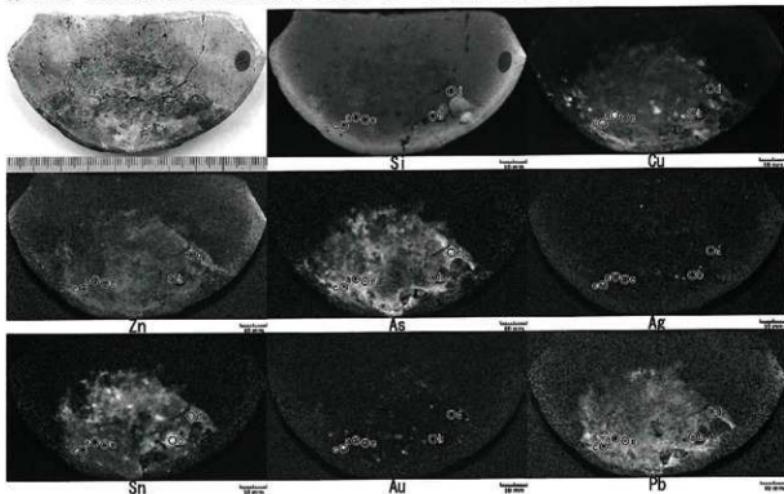
1. ヒノキ(木屑3)、2. スギ(木屑1)、3. モクレン属(Na26)、4. コナラ属コナラ筋(Na26)、5. タケ亜科(木屑2)、
6. マツ属複維管束胚属(252遺構;炭化材)、7. クリ(252遺構;炭化材) a:木口, b:径向, c:板目

第48図 溶融物付着上器（分析No.1）内面の元素マッピング図



Si : ケイ素 Cu : 銅 Zn : 亜鉛 As : ヒ素 Ag : 銀 Sn : スズ Au : 金 Pb : 鉛

第49図 溶融物付着土器（分析No.2）の元素マッピング図および目貫（分析No.3）の測定位置



Si : ケイ素 Cu : 銅 Zn : 亜鉛 As : ヒ素 Ag : 銀 Sn : スズ Au : 金 Pb : 鉛

第V章 総括

今回の宮元町遺跡の調査においては、非常に多くの知見が得られたが、膨大な遺構・遺物量からすべての成果を提示することは難しかった。ここでは、数多く検出された遺構の変遷を時期別に整理することで、不足を補いたい。

また、江戸時代から続く地名である「鞘町」から数多くの鞘や柄、刀装具類が検出されたことは特記される。それらの観察や調査時の知見から、高崎城下における職人町の実態について若干の考察を加えることで、本調査の総括としたい。

1. 城下町の区画

検出された遺構のうち、区画溝、排水溝等で区切られた区画は町域、あるいはその中の町屋の区画を表し、それぞれが様相を異にする。また、間隙地としての機能を果たしていたと考えられる部分がある。今回の調査区では、まず 201 や中央の南北の区画、あるいは 1008 を含む東西の区画がそれにあたる。各時期で大型の遺構が多く、土取りや集水など公共の用途に用いられた性格の遺構が多い。鞘町側は現在まで踏襲されている町屋の区画が残り、今回は 5 軒分の範囲に及んでいる（図 50 図 町屋①～⑤）。

町屋①は近世において比較的早い段階から遺構が現れ始める。18 世紀中葉以降と 19 世紀前葉以降廃絶の土坑から鞘片や取鍋などが検出され、当該期には金属加工を伴う加工を行っていたと考えられる。これらの遺構は主に西側に分布する。

町屋②は両隣の区画とは性格が異なる。取鍋などの金属加工の痕跡はほとんど見られない。比較的近世期の盛り土が厚かったと考えられ、19 世紀前葉に東側に盛んに焼土坑などが掘削されるが、第 2 面を検出した V 層堆積層まで及ぶ遺構は少ない。

町屋②と③の間に最大 2 間ほどの細い間隙地があり、18 世紀中葉を中心とする時期には炭化物を多く含む土坑 252 他や 284 が東西の軸を同じくして並び、また 284 は町屋③の区画内である 057 と接合関係があるため町屋②よりは③と関連の深い区域と考えられるが、町屋③で当該期に特徴的な取鍋などの遺物がほとんど見られないと、屋外、屋内などの別があったと考えられる。その傍証となるのが As-A 降下後の処理坑の分布であり（図 55）、同じ南北軸の部分のみ他の処理坑が分布するラインより東側に処理坑が並ぶため、建屋の外であったと考えられる。

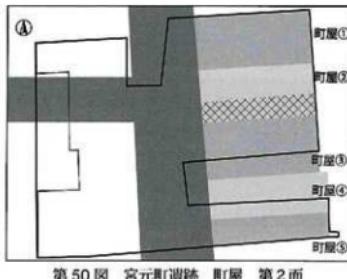
町屋③は多量の鞘や取鍋等の金属加工や塗加工の痕跡が濃密に分布する。関連遺物の検出は東西を問わず分布するが、18 世紀中葉は中央部分に、19 世紀前葉には東寄りに分布の中心が移るようである。西寄りからも出土するが、区画溝付近は比較的廃棄土坑の性格が強い。

町屋④は既存建物とその南側を含むが、調査区内も上層の擾乱が激しく、土坑 402、403、404 が検出された他は詳細が不明である。

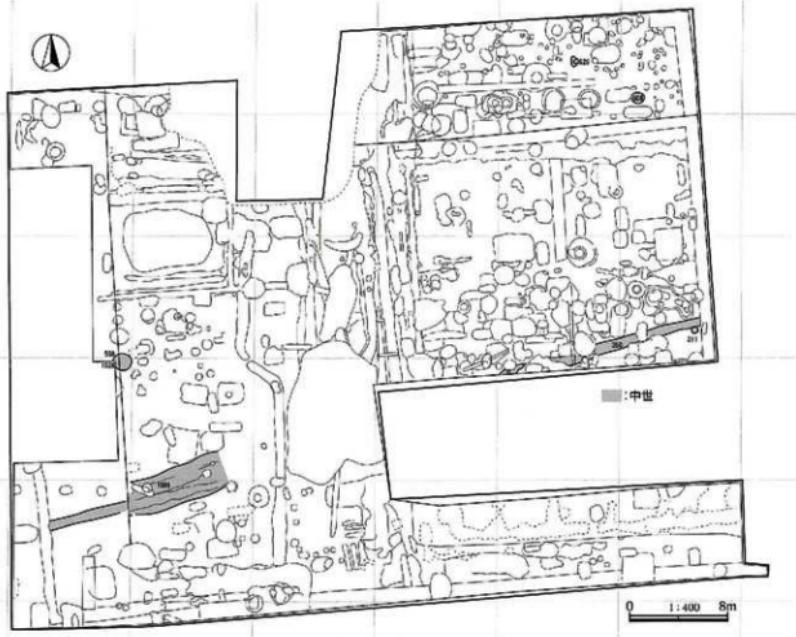
町屋⑤は調査できた部分は少ないが、227 等の鞘の廃棄土坑を含む点では町屋①、③と近似するが、取鍋等の金属加工の痕跡は確認できない。

2. 遺構の時期別変遷

今回の調査では調査時層別に遺構を分離することは困難であったが、整理作業を進める中で比較的遺構の密度が低い近世中葉、As-A の降下を挟み製作関連の遺構が盛行する 18 世紀中葉と 19 世紀前葉、幕末から近代にかけてと、粗削りではあるが様相の違いが抽出できた。出土遺物の下限年代を示した遺構廃絶年代をもとにしているため、必ずしも同時期の遺構分布を正確に示しているわけではないが、以下に時期別の変遷を示し、理解の助けとしたい。



第 50 図 宮元町遺跡 町屋 第 2 面



第51図 宮元町遺跡全体図（中世）

中世～17世紀初頭

中世に属する遺構は溝1条、井戸2基、柱穴2基である。

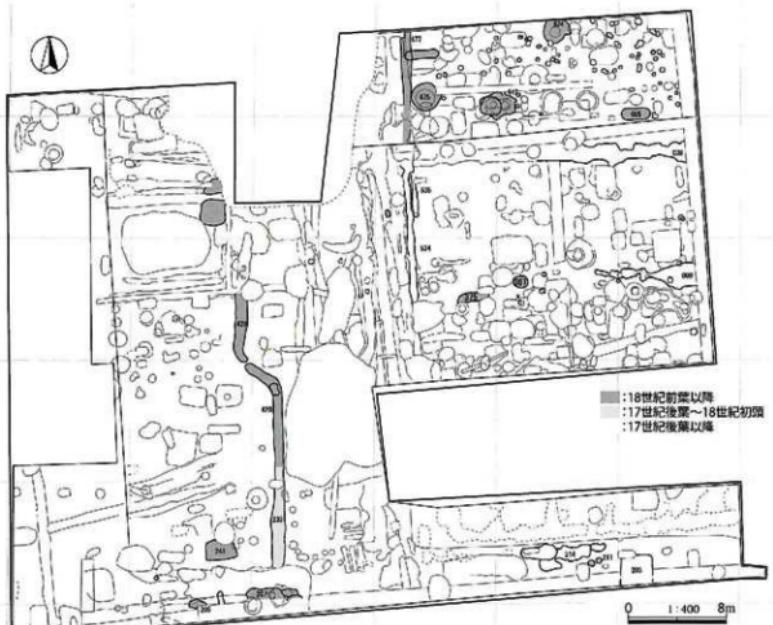
溝350は基本層序V層上面より掘り込まれ、溝底はVI層に達し、覆土はAs-Bを含むラミナ状を呈し、水流があり自然堆積で埋まると考えられる浅い溝である。調査区西側は第3面のみの調査で、東側では上面を複数土坑に切られるため1条のみの検出であったが、調査グリッドP、U付近では断面が詳細に観察でき、複数の溝として検出された溝1001は同一遺構である。主軸は北東から南西に向かって傾き、近世以降のほぼ東西南北に近いV画とは異なる。調査区東側の鳥川沿いの微高地と低湿地の境界に直行しており、自然地形に沿ったものと考えられる。出土遺物は少ないが、内耳鍋と陶器片が出土している。

井戸606は素掘りの井戸である。直線的に掘り込まれ、東側に丸木の木材が打込まれている。湧水のため完掘はしていない。

井戸568は検出面に向かって漏斗状に開く。遺構の東西で検出時期が異なるため、東側に附番した1028は同一遺構である。深掘りを行い、第3面の検出面から1.12mで井戸底を検出した。遺物は検出されなかったが、As-B混土を多量に含む覆土であるため、中世期の井戸と判断した。

柱穴は近世期の土坑626の底面より検出され、礎盤石を持たない柱穴である。内耳鍋片が出土している。明確に中世期の遺物を検出したのは当遺構のみであるが、周囲では複数の柱穴を検出している為、中世期の掘立柱建物が存在していた可能性がある。

柱穴311は礎盤石を持つ柱穴である。絵唐津の陶器片が出土しており、中世あるいは近世初頭の可能性がある。周囲にはやはり柱穴が複数検出されているが、同様の深さを持つ遺構は検出されなかつた。先述の350と隣接しており、明確な切り合いはないが350廃絶後に掘り込まれたものと考える。



第 52 図 宮元町遺跡全体図（17C 後葉～18C 後葉）

17世紀後葉～18世紀前葉

近世初頭の遺構は明確に検出されていない。先述の 311 の存在を考えると、明確な時期判定できない柱穴がそれにあたる可能性もあると考えるが、当該期の遺物も少なく、全体として希薄な時期である。008 には石組の時期より前に素掘りの溝遺構が層位で確認できる。As-B 減移層上から掘り込まれているため、この時期には存在していた可能性がある。

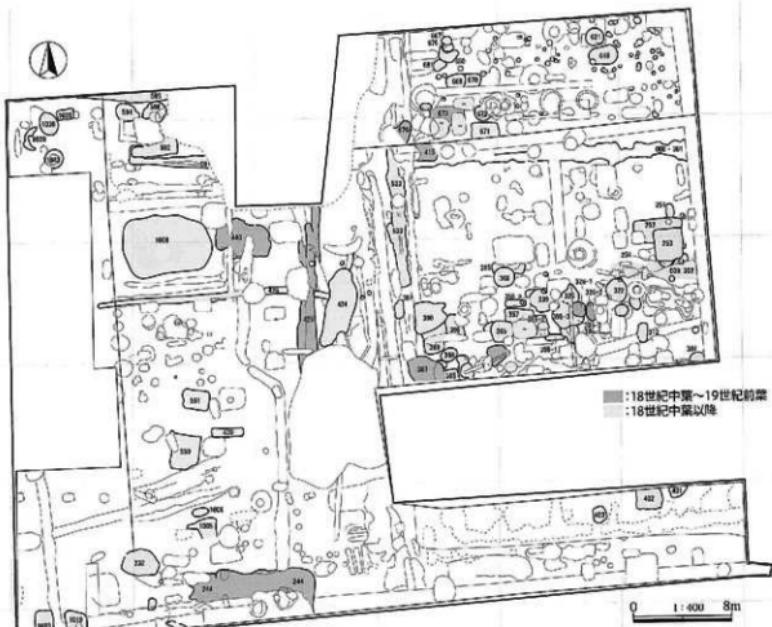
明確な遺構が検出されるのは 17 世紀後葉になってからである。南北の区画溝 233 は 428 と接続する溝であり、調査時期の違いで別に附番したが、時期差は継続時期を表すものと考える。

また、677 も同じく南北の溝であり 2 本の溝が重なっている。535、534 は近代としたが、遺物の混入の可能性もあり、677 につながる溝であった可能性がある。当該溝より西側にはこの時期以降複数の溝が掘りなおされており、この時期傾斜割が整備されはじめ、東の堀町側と西の宮元町側に様相の違いが出始めている。また、2 本の溝に挟まれた中央の区画も存在し、間隔地あるいは路地のような状態であった可能性もある。

堀町側の 675、624 は素掘りの井戸である。675 が開口部が漏斗状に開き、624 はテラス状になる。また、624 は焼土塊を多量に含む土で埋没している。647 は桶埋設遺構の抜き取り後と考えられる。方形の土坑の底面に溝が円形に掘り込まれており、同様のプランが東西に連続しており、東側が西側に切られている。

宮元町側の遺構 205 は皿 8 枚を上限とする同一柄の組み物の磁器を中心とし、覆土には炭化物が多量に含まれていた。火災後の一括廃棄の可能性がある。堀町側の 211 を中心に出土した皿も 8 枚を上限とし、近接する 203、214 と接合関係にある。

当該期の遺構はまだ希薄であり、北東と南西にやや偏りが見られる。



第53図 宮元町遺跡全体図（18C 中葉～18C 後葉）

18世紀中葉～18世紀後葉

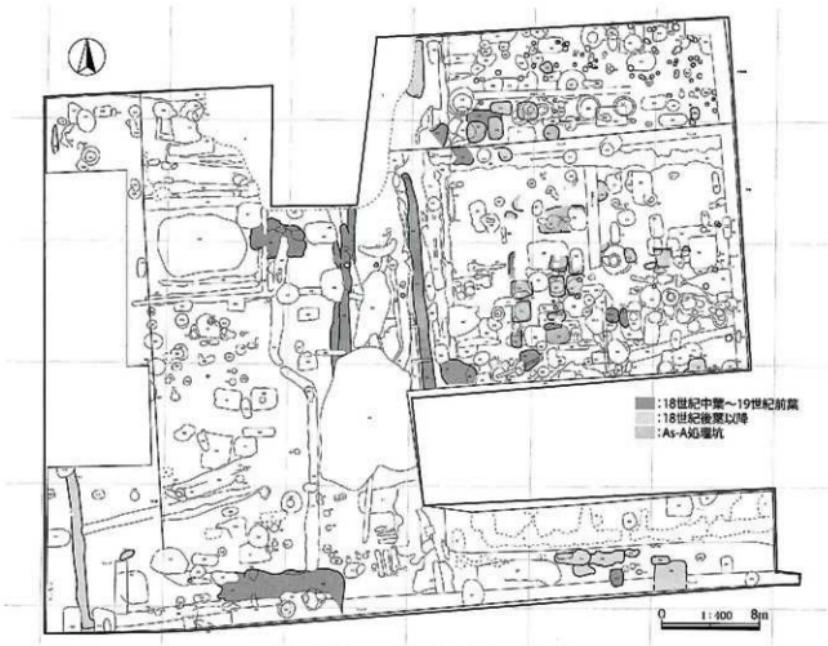
18世紀中葉に遺構数は爆発的に増加する。南北区画溝533、423、425は内側に向かって掘りなおされ、東西方向の溝301（008と同一遺構）、302（009と同一遺構）もこのころには石組みを備えた作りに変化しているなど、東の稻町側では町屋の区画が明確になっている。

301の北側、302の南側は、濃密に遺構が分布する。焼土や炭化物を含み、鞘の破片や取銅などの製作関連遺物を多数含み、隣接して複数の土坑が繰り返し掘られている。301北側区画では西寄りに遺構が集中するのに対し、302南側では東側から西側の区画溝付近まで全体的に分布する。

南西側の244は広く浅い溝状遺構で近接する土坑232、241と共に覆土に均質な炭化物と陶磁器類の他に鉄釘が多く含まれている。これらの遺構の出土遺物は当該期の他の土坑に比べ上手のものが多い。

焼土坑が多数検出されており、401、402、561、559、618は橙色の焼土塊を多量に含み、検出地点は離れているが非常によく似た覆土であった。鞘町側、宮元町側の別なく分布することから、被害が両町にまたがるような火災の処理坑の可能性がある。18世紀中葉以降の廃絶年代を考えると宝曆9年（1759）に当遺跡の北西にあたる北郊（今の中川町西）より出火し、南にあたる千歳町（今の下横町）まで焼失したという大火によるものか。

一方、252、253は、炭化物を多量に含む黒色の覆土である。焼土もわずかに含むが、均質な大きさの炭化物が主体であり、鍛冶関連の燃料の可能性も考えられる。また、廃絶年代は異なるが252は284と遺物の接合関係があり、同時に存在していたと考えられる。これらは、金属加工に伴う燃料の貯蔵、あるいは製造に用いられていた可能性も考えられる。



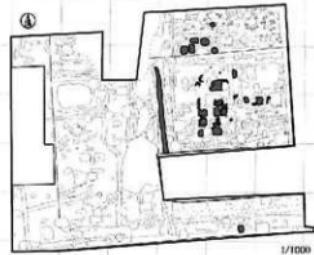
第54図 宮元町遺跡全体図（As-A 降下前後）

As-A 降下前後

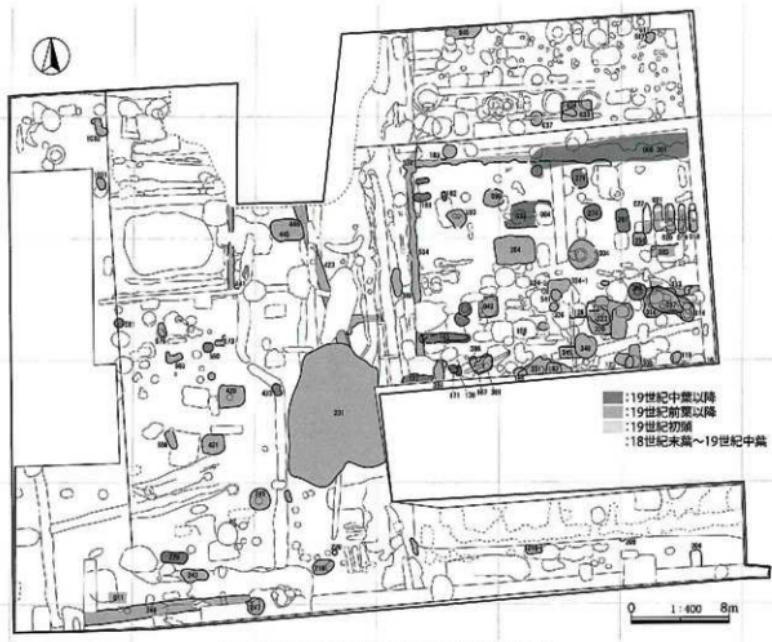
天明3年（1783）の浅間山の噴火による降灰（As-A）の影響は調査区の各所でみられるが、一次堆積は確認できなかった。

溝352は前項の溝533のさらに西側に掘りなおされ、As-Aを多量に含む土で埋没している。

As-Aは、遺跡内各所で取り片付け坑として確認できる、鞘町側では東西に長い区画の中央より西側に集中して検出される。中央より東側に分布する処理坑があるのは、排水溝脇の通路のような区間であったのだろう。いずれも遺物はほとんど含まず、処理坑の集中は建屋を避けたためと考えられる。降灰は建屋に影響が出るような被害ではなく、敷地内の建屋の隙間地に処理することで済む程度であったと考えられる。一方、区画溝を挟んだ宮元町側では、南側の断面にわずかに処理坑が確認できた以外はあまりAs-Aの痕跡が見られなかった。敷地外に搬出して処理した可能性もあるが、上面が搅乱を受けている部分も多かったため今回の調査区内で単純に比較するのは難しい。



第55図 宮元町遺跡 As-A 処理坑全体図（18C後葉～）



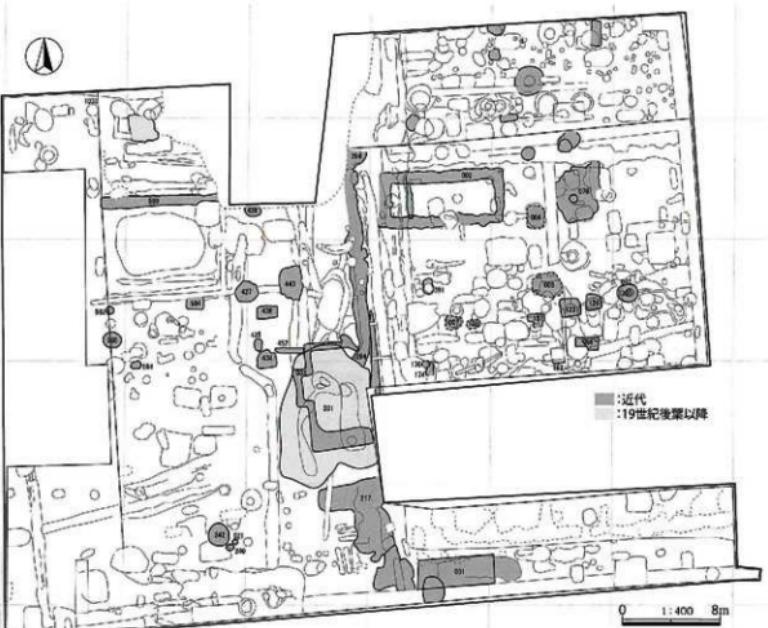
第56図 宮元町遺跡全体図（19C前葉～中葉）

19世紀前葉以降～幕末

少なくともこの時期には調査区中央付近に池状遺構201が掘削されている。溝423は開削に近い時期に201に接続していたと考えられる。201の最下層堆積は比較的遺物が少なく、比較的美しく保たれていたと考えられる。

第1面では長方形に規則的に並んだ焼土坑が検出された。橙色の焼土や炭化物を多量に含み、多量の遺物を含むものが多い。そのうち020、021、022から検出された破片が接合している。また、429、431も同様の時期の焼土坑であり、やはり堀町と宮元町の別なく焼土坑が存在する。検出遺物からは19世紀前葉以降の廃絶と考えられ、文化9年（1812）本町から出火し900軒焼失した大火に比定できるのではないか。焼土坑429、431は前項の561、559と時期が異なるがプランや配置が近似している。

再び堀町側では製作関連遺構が増加する。特に302南側では関連土坑は同一の位置に複数回土坑が掘りなおされている状況も認められる。最終的な廃絶は当該期であるが、前代から継続して利用されていた可能性が高い一方、これだけ遺構が重複する中で、僅かだが重複の少ない部分もあり、その対照が示すものは、ある程度作業場としての空間の固定化であるとも考えられる。一方で301北側は、As-A降下前は盛んであった堀製作が下火になるようである。池状遺構201は幕末頃一度大量の有機物や遺物で廃絶している。さながらゴミ捨て場の様相であり、石組みや堰を持つ当初の景観はここで失われている。



第 57 図 宮元町遺跡全体図（19C 後葉～近代）

幕末～近代以降

池状造構 201 は幕末頃大量の遺物で急速に埋まつたのち再掘削され、明治時代に溝 294 の延長の木枠を持つ溝状造構になる。

東西溝 589 と土坑 217 も 294 と同時期の造構で、それぞれに遺物の接合関係が認められた。いずれの造構も大量の遺物廃棄により埋没している。217 は現代まで複数回掘りなおされ、いずれも遺物が大量廃棄されている。

001、002 をはじめとした蔵基礎が稻町側の区画溝付近で検出され、近世以降の区画が維持されながらも街並みの変化を感じられる。前項まで見られた殿治関連遺物は見られない。鞘を出土した 227 は近代以降廃絶したが、001 建設時等の搅乱による混入とみて稍開通土坑は近世に收まるものと考えたい。

宮元町側は上層を搅乱により失っている部分が多く、詳細は不明であるが、調査区の南西で礎石群 011（第 7 図参照）を検出している。やはり地盤改良のため丸木の杭を打ち込んだ後礎石を据えている。また、床面が埴上化しており、火災により建て替えられている。土層中に漆喰に挟まれた土壁が観察でき、漆喰塗の建物が想定できる。

この時期に廃絶する井戸 303、242、1033 はともに上層に多量の炭層で埋没している。白色の部分が多いことから亜炭層の可能性もある。また、303 は 161、1033 は 354 と統制陶器や軍関連の遺物を含んでいる。溝 297 にはのちの高崎陸軍病院の前身であり明治 21 年から昭和 11 年にかけて使用された名称である「高崎衛戍病院」とエンボスのある瓶 155 が含まれており、管内ではないもののこの地域も第十五連隊との関連をうかがわせる。

当該期は造構分布に偏りがあるが、造構の存在がないわけではなく、むしろ激しい搅乱のため造構認定が困難であつたという調査上の問題点を反映したものであることを明記しておきたい。

3. 刀装具類

今回の調査では 18 世紀中葉と 19 世紀前葉を中心とした時期の遺構から多くの刀装具や製作関連遺物が出土した。これらの出土状況から、いくつかの考察を試みたい。

検出された鞘や柄はいずれも漆が厚く塗られ、工具により切断、あるいは引きはがしたような痕跡が残るものが多い。調査の精度の問題もあるとは思うが、柄は比較的長さが残るのに対し、鞘は先端部分である小尻部分を残す部位の出土が圧倒的に多い。このように鞘に完形品がないことは、曲がった裏瓦に代表されるように鞘の柄側の部分は笄模や小柄模等に使用された金具類を取り外して再利用するため、鞘の腰口側はさらに細分され破棄されていたのではないかと考える。また、柄 3 点の内 2 点は柄巻をしていた痕跡を残すものであり、その 2 点を検出した土坑からはやはり柄巻を施す痕跡である鶴目穴のある頭金具が検出されている。それぞれ平と鶴目穴の距離が異なるため同時使用されていたものではないが、同じ遺構から柄巻の痕跡が検出されている。

今回の調査では刀装具類の他に金属加工に伴う取鉗や縫羽口、針金や金属板の加工品、工具類等も多量に検出された他、土坑 314 の覆土中には金属板片や細かな金属切片が含まれており、金属の切断・溶解を伴う加工を行っていたと考えられる。多量に出土したカワラケを用いた取鉗の内、土坑 330 と 355-2 から出土した 2 点（186 と 211）を分析し、それぞれから銅や亜鉛、錫等が検出されたが、186 からは 211 に含まれない金、銀の成分も含まれており、加工に用いられた材料は均質ではない。

漆加工に用いる漆漉し紙やパレットにした陶器器類も多く出土している。これらは金属加工にかかる遺物と同じ遺構に混在した形で検出されているものが多く、出土状況から明確にこれらとの作業工程を区分することは困難であった。出土した刀装具類を観察すると、鎌や筒金など金属を装着する前後に漆を重ね塗りした痕跡が確認できるものがあり、やはり金属加工と漆塗りは作業工程として分化していないようである。

これらの状況から、当遺跡内では鞘や柄などの刀の柄を解体して部品を取り出して一部を再利用しながら、切金やロウ付けなどの金属加工や漆塗りの技術を組み合わせて新たな柄を作成していたと考えられる。

新たな柄の候補として挙がるのが右京柄ではないだろうか。右京柄とは、高崎藩主大河内輝貞（8代在位 1695 ~ 1710 年、10 代在位 1717 ~ 1745 年）が創始したとされるもので、輝貞の受領名が右京の亮・右京大夫と称したことによる。右京柄とは、それまでの駒皮や柄巻を用いた柄とは異なり、太刀柄の姿を残した柄で、太刀金具をつけ、木地柄に筒金を嵌めた刀装に特徴がある。

当遺跡の出土品を見ると、4 の柄は柄巻をせず、筒金といわれる金属の帯を巻いた痕跡があり、出し目貫を止めた針金が残る。同じ土坑 314 からは帯状金具 11 が出土しており、これは鎌形状の筒金を盤で切り出した切片と考えられる。右京柄がエンジュやタガヤサンなどの堅木の温孔材を用いて木地柄とするのに対し、4 の柄は樹種同定で散孔材である朴の木を使用していることがわかつており、漆柄であるから単純に右京柄に比定することはできない。しかし「柄巻をする柄から筒金を巻く柄へ」という大きな需要の変化があったことが読み取れる。

大河内輝貞の城主就任により藩士たちは柄を作り替える必要に迫られ、受注を受ける側の職人も需要の変化を受け、それまでの職人間の役割分担に大幅な変更を迫られたであろう。今回の調査で検出された刀装具関連の出土状態はそういう技術の転換に伴う変化を表していると考えられる。

4. 職人町の成立と変遷

刀の柄は通常、刀工、研師、白銀師、鞘師、塗師、柄巻師、鍔師など複数の職人の間を行き来しながら制作される。鞘町の町名の由来ともなった鞘師は主として刀身を保護するための白木の鞘を制作し、漆で仕上げられる柄についても、鞘や柄の芯となる下地の制作を行う職種であるとされる。

寛政 9 年（1797）に発行された『高崎志』によると、鞘町は「鞘町ハ外形食道木戸方ノ町也暨モ慶長年中箕輪ヨリシテルト云此町鞘師多ク居ル故に名ツク」とあり、高崎城域下町成立時から存在していたことがわかる。しかし、当遺跡で 17 世紀代の遺構や遺物の検出は限られており、鞘製作の痕跡が顕著になるのは 18 世紀中葉以降である。

そこで同じ『高崎志』の白金町の項目を見ると「昔此町白銀師アリ故ニ名ツク元ハ鞘町ノ分也其頃住シ後藤某以下皆鞘町ニ移リシ後人漸ク多クナリテ別町トナル今ハ名ノミニテ金具師ナシ」とある。少なくとも『高崎志』が発行された 18 世紀末にはすでに白金町の金具師は鞘町に移住していたことになる。

近世城下町の地割は、公権力形成期に見られる城を中心とした縦町型から立地によって秩序の生じない横町型の地割へと変化していくことが指摘されており、高崎城下町も例外ではない。安政期の地図を見ると鞘町も高崎城を正面とした東西方向の縦町の地割を残しており、田町を挟んで延長上に白金町がある。現代でも鞘町の町域は縦横両方の地割が残る十字型をしており、同様の現象は連雀町・鍛冶町・檜物町・新紺屋町など、箕輪城からの移城時に移ってきた複数の町に認められる。

城下町成立当初は鞘町、白金町が一続きの町として東西の道沿いに刀装具関連の職人たちが集まり、刀や槍が各職人間を行き来し制作を行っていたのであろう。ところが、中山道の開通に伴い高崎城下は横町型の南北方向の地割に転換する。田町によって鞘町と白金町は分断され、街道筋がにぎわうにつれ職人間の行き来には次第に不都合が生じたことは想像に難くない。先に示したような街の需要の変化は、さらにその傾向を強めたであろう。『高崎志』に見える白金町の金具師の移動は、そういう文脈の中で生じたものではないだろうか。

移動先の候補になったのは、鞘町の中でも城下町成立時、縦町の地割に挟まれ、近世初頭には比較的閑隙地に近かった当調査地を含む区域であったのではなかろうか。実際、遺構として検出した現在の地割にも引き継がれる南北の道に面する東西方向に長い地割は後出となる横町型の地割に一致する。

部分的ではあるが、白金町にかかる区域が発掘調査されており(『連雀町遺跡』2016)取扱用カワラケや韁羽口、砲弾型の坩堝等が検出され、鍛冶構造の存在が指摘されている。砲弾型の坩堝の出土はないものの当調査区と様相に類似点がある。また、溝に多量に産出した陶器器類が当調査区では出土量の少ない17世紀末葉~18世紀前葉である点も特記される。直接今回の調査結果と結びつけるのは早計かもしれないが、高崎城下町の様相を知るうえで、非常に示唆的な成果であるといえるのではないだろうか。

今回の報告において刀装具に関しては大江正行氏と平野進一氏に多くのご教示をいただいた。特に大江氏には生涯にわたり情熱を注いでこられた刀装具研究の知識を惜しげなくご教示いただいた。本書は氏のご協力がなければ成立しなかったことを記して感謝の言葉としたい。筆者の力量不足故十分に成果が生かしきれなかった部分が多くあるが、今後の課題としていきたい。

参考文献

- 群馬地域文化振興会 2019『高崎志 上中下 鹿角版』原著発行 1797(寛政9年)
- 山川治正 2016『連雀町遺跡』高崎市教育委員会
- かみつけの里博物館 2005『高崎藩の考古学—近世城郭、城下町を読み解く—』
- 平野進一・小山友孝 2007『右京精考—上野国高崎の特色ある刀装について—』『群馬県立歴史博物館紀要 第28号』
- 福永泰則 1993『日本刀大百科辞典』
- 群岡瓦窯史研究会 1977『群岡のかわら史』
- 国立歴史民俗博物館 2013『時代を作った技—中世の生産革命—』
- 国立歴史民俗博物館 2017『URUSHI ふしが物語—人と漆の12000年史—』
- 第66回埋蔵文化財研究集会事務局 2017『高崎市下町の近世都市遺跡における生産と流通—』
- 高崎市 2004『新編 高崎市史 通史編3 近世』
- 高崎市 2000『新編 高崎市史 通史編2 中世』
- 高崎市 1999『新編 高崎市史 通史編1 始古代』
- 鞘町史編纂委員会 1978『高崎市 瓢町史』
- 高崎市市史刊行委員会 2000『高崎市 瓢町史Ⅱ』
- 宮本健明 都市史研究会 1994『城下町の空間類型』『年報 都市史研究 2 城下町の類型 都市史研究会』
- 高崎市教育委員会 1998『高崎市道路分布地図 高崎市内道路詳細分布調査報告書』